

JSTA 日本熱帯農業学会

熱帯農業研究

第3巻 別2号

日本熱帯農業学会第108回講演会
研究発表要旨



会場：沖縄コンベンションセンター
(琉球大学)

2010年10月9・10日

ラオスにおける農村文化再評価による新しい農村開発の試み
—集落文化資料館の設立—

矢嶋吉司、虫明悦生、*安藤和雄（京都大学東南アジア研究所）

Alternative Rural Development Approach by Re-evaluating Rural Culture in Laos:
Establishment of Village Cultural Museum

Kichiji YAJIMA, Etsuo MUSHIAKE, *Kazuo ANDO (CSEAS, KU)

キーワード： 農村開発、ラオス、集落文化資料館

Key Words: Rural Development, Laos, Village Cultural Museum

はじめに

人口の大多数が農村に暮らすアジアの開発途上国では、国の安定的発展のために、多くの農村開発事業が実施されてきた。経済的な豊かさの実現を目指し、生活様式の近代化を急進しようとする既存の農村開発パラダイムは、伝統的生活様式・農法や生活・生業の道具類などを古く遅れたものと見なし、改良してきた。その結果、森林減少や農地荒廃などの自然環境の悪化や、農村から都市への人々の移動が加速された。

ラオスにおいても、近代化を急ぐ農村開発政策により農村は急激な変化の波にさらされ、伝統的文化や「在地の知恵や技術」などコミュニティに蓄積された知識や経験は軽視され、コミュニティの機能が急速に失われている。コミュニティに受け継がれてきた知識や経験の安易な否定は、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」精神的な結束を弱め、ラオス農村の持続可能な発展を阻害しつつある。

日本の農村においても、高齢化、過疎化、都市との格差の拡大によって崩壊寸前の危機的状況となっている。これら状況を招いた一因は、農村開発事業が、農村社会とそこに暮らす人々の生活の知恵や技術から、開発のヒントを学ぼうとせず、経済的な豊かさを重視した「過去」の農村開発パラダイムにしばられてきたためである。そのため、日本では、農村に住む人々が、自分たちの受け継いできた文化に自信を持ち、主体性を取り戻すための、伝統的な道具類を収集展示する文化資料館や集落民俗資料館がつけられ、在地の知恵や技術が育んできた「くらしといのちの豊かさ」の再認識を通して、農村の振興を図る「在地」の農村開発アプローチが始まっている。

日本の経験を元に、2008年からトヨタ財団の助成金（代表者：安藤）を受け、京都大学東南アジア研究所が、ラオス国立大学農学部とPADETCと協働して、伝統文化や道具類の保存展示を行う集落民俗資料館の設置を通して農村コミュニティ開発を試みる実践的調査研究に取り組んでいる。本報告では、その取り組みについてこれまでの経過を述べてみたい。

1. 調査地及び方法

1) 調査地域

実践調査研究の調査対象地域は、農学部と現地の地方行政（郡役所）の協力を得て選定したラオス中央部のビエンチャン特別市の2村（サイタニー郡ドンバン村、タチャンパ村）と、ラオス南部アッタプー県のサマキーサイ郡ラーニャオ村の計3村とした。

2) 調査方法

日本とラオスの大学研究者が協力して、伝統的文化や在地の知恵や技術を積極的に評価、再認識するNGOが実施しているプログラムとラオス国立大学農学部のラオ農民伝統農具博物館を連携されるアクションリサーチ（実践研究）の方法によって実施した。以下の項目に研究者も実践的に参加し、日本及びラオス農村で実施する農村の歴史と文化の再評価、再創造活動をネットワークでつなぎ、相互訪問により農村の歴史と文化の意義と、再評価・再創造の活動の具体例を相互啓発的に学びあうことで、「在地の農村開発アプローチ」とでもよべる新しいアジア農村発展モデル構築することを課題とした。

i) 文化の再創造活動の推進

NGO、農村住民、大学関係者が連携し実施している、伝統的文化や「在地の知恵・技術」を評価、再認識する活動を推進している。具体的には、集落文化資料館の設置の推進、農学部「ラオ農民伝統農具博物館」の活動とPADETC(NGO)のコミュニティプログラムとの協働を通しての実践的研究実施している。

● データベース作成： 伝統的文化や「生活と生業」の道具・技術(使われ方)、伝承(言い伝え)や芸能(歌や踊り)などを、農村住民集会など農村住民が直接参加する参加型手法による村落調査によって資料を収集する。

● 日本の知見の活用。

● 生活、文化の公開プログラム。

● 伝統的な文化、生活に依拠する文化芸能祭、村人の相互訪問などプログラム。

ii) ネットワーク構築と社会的課題の解決

ラオスと日本の村人、NGO、NPO、地方行政、大学関係者からなるネットワークを構築する。

● 日本の
の日本
● 上記の
● 農村の
い試み
上記の
デルの提
2. 結果と
1) 調査地
● ビエン
30Kmに
ンバン
周囲は
一方、
る。多
整備は
● アッタ
モン・ク
工芸技術
道具類の
2) これま
これまで
● ラオス国
ラオス側
意義を理
山町知井
● データベ
質問票を
村内の文
● 集落文化
伝統文化
ンパ村、
i) タチ
2009年8月
の小学校の校
れた。建築費
ジュール、村
められた。木
工事が始まり
残りをプロジ
スペースとし
して利用する
ii) ラーニ
一方、ラー
れた。材料は、
森から伐採さ
に加え、郡役所
った。村では、
料館の活用が
3) 今後の課題
2村では、村
になって建物を
を残していくこ
いる。しかし、
集落文化資料館
たち、特に老人
山町など日本の

- 日本の取り組み（農村の伝統文化と歴史を重視した集落文化資料館、住民の主体的地域おこしの日本農村の新しい試み）を学ぶラオス関係者の日本の農村訪問と住民との交流。
- 上記の文化の再創造活動に対するネットワーク参加者による助言、計画立案等への協力。
- 農村の伝統文化と歴史を重視した集落文化資料館、住民の主体的地域おこしの日本農村の新しい試みの相互訪問学習と意見交換、セミナー・ワークショップの開催。

上記のような実践を通して、文化再創造としての「地域で生きぬく」新しいアジア農村発展モデルの提唱を行う計画である。

2. 結果と考察

1) 調査地の概要

- ビエンチャン特別市サイタニー郡ドンバン村とタチャンパ村： ビエンチャン市から北東に約30kmにあるラオス国立大学農学部キャンパスの近郊集落。グム川(Nam Gum)の南に位置するドンバン村は約150世帯、そのほとんどラオ族で仏教を信じている。150年ほど経た古い村で、周囲はほとんど農地として開かれている。政府の重点農村として集会場など整備が進んでいる。一方、グム川の北岸のタチャンパ村は約20年前にできた新しい村で80世帯ほどが暮らしている。多くは黒タイ族の人々でアミニズムを信じ村には仏教のお寺はない。小学校以外インフラ整備は行われず、開発の遅れた村で、郡役所も村の開発には大きな関心を持っている。
- アッタプー県サマキーサイ郡ラーニャオ村： ラオス南部カンボジア、ベトナム国境に近く、モン・クメール語族のオイ族の村で、村には、まだ古い道具が多く残り、竹細工など伝統的な工芸技術が受け継がれている。政府の文化村事業の指定を受け、郡役所も積極的に伝統文化や道具類の保存を進めている。

2) これまでの経過報告

これまでに、村では以下のような活動が実施されている。

- ラオス国立大学農学部教員3名による日本訪問スタディツアー
ラオス側の研究協力者に日本の中山間地の農村と農村振興の現状を通して、伝統文化の保全の意義を理解してもらう目的で、2009年2月～3月にかけて、京都府亀岡市文化資料館、南丹市美山町知井振興会、同北集落と「かやぶきのさと民俗資料館」などを視察し関係者と交流した。
- データベース作成のためのサンプル調査の実施
質問票を作成し、世帯聞き取り調査を実施。村の特徴の把握とともに、集落資料館に展示する村内の文化や道具類の情報の入手。
- 集落文化資料館の建設
伝統文化展示室が付属した集会場が、すでに建設されているドンバン村を除いた2村（タチャンパ村、ラーニャオ村）では、集落文化資料館の建設を行った。

i) タチャンパ村

2009年8月、村長をはじめとする村役たちが、建物のデザインを決め建設費用を見積もった。村の小学校の校庭に隣接する敷地に建設が決まり、設計図の代わりに高床式の建物の模型が作製された。建築費用としてプロジェクトがUS6,000ドルを提供し、不足分は村が補填した。工事スケジュール、村の工事監督・運営体制、材料手配の方法など村が決定し、農学部の監督で工事が進められた。木材は、郡役所の許可を得、近くの森の樹木が伐採され、使用された。2009年11月に工事が始まり、2010年6月に完成式が行われた。総工費約US7,550ドル（約1,550ドルを村が補填、残りをプロジェクトが提供）に加え、村人が労務を提供した。当初建物の1階は、オープンの集会スペースとして計画されたが、最終的に壁で囲われ、村の集会場が設けられた。村の公共施設として利用するという村人の要望が生かされた。

ii) ラーニャオ村

一方、ラーニャオ村は、2010年12月、村人によって設計図、見積書が作成され、工事が開始された。材料は、地方行政から機械（チェーンソー）を使用しないことを条件に許可を受け、近くの森から伐採された。釘など使わない伝統的な技法で建設が進められた。村の女性同盟のリーダーに加え、郡役所の役人たちから文化資料館の建設に積極的な協力を得た。2010年7月に完成式を行った。村では、竹細工など伝統工芸や技術が伝えられ、将来観光客の増加を視野に入れた文化資料館の活用が期待されている。

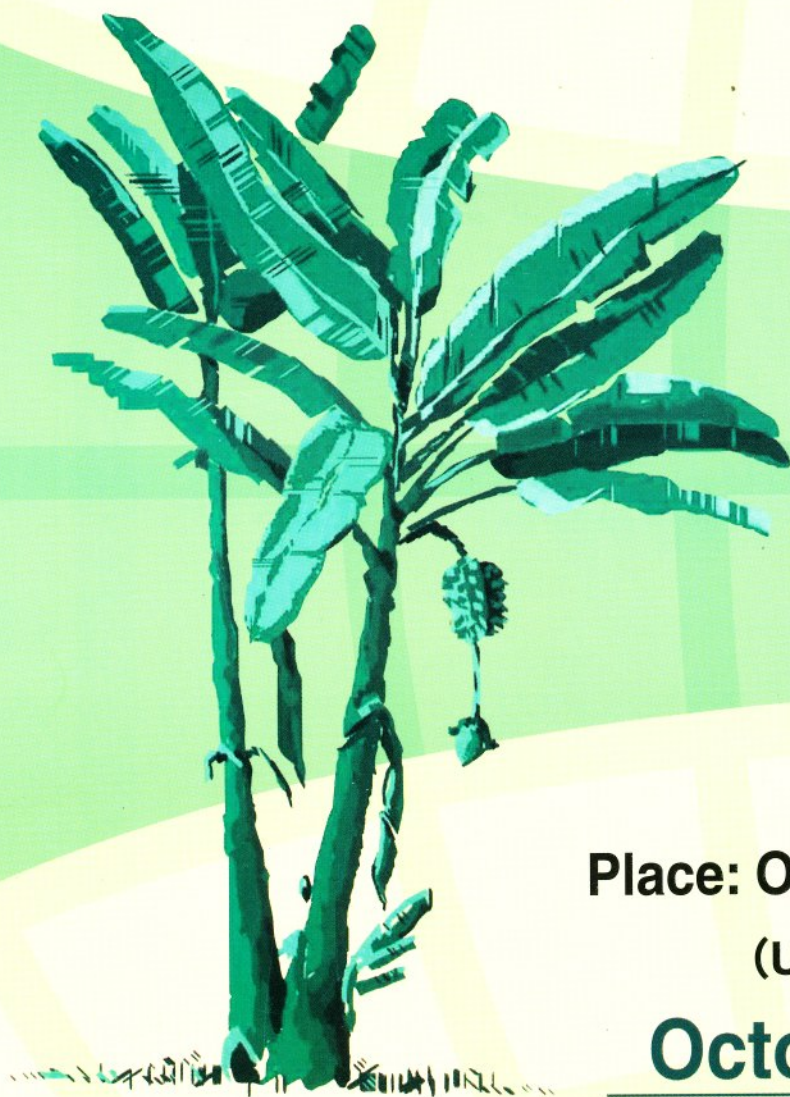
3) 今後の課題と展望

2村では、村人の参加によって、集落文化資料館を設置した。村人の中には、自分たちが中心になって建物を作ったという自信が生まれ、現在、関係者の間では、自らの伝統的文化や道具類を残していくことが必要だという機運が生まれている。建物のより有効な活用の検討が始まっている。しかし、村には文化資料館運営ははじめてのことで、手さぐり状態である。今後の課題は、集落文化資料館の活動を通して、歌や踊り、技術など伝統文化を次の世代に伝える活動に、村人たち、特に老人や子供たちの参加をいかにすすめていくかであろう。そのさい、京都府南丹市美山町など日本の農村がこれまで蓄積してきた経験がおおいに参考になると筆者らは考えている。

Japanese Society for Tropical Agriculture

***Research for
Tropical Agriculture***

Vol. 3, Extra issue 2



**Place: Okinawa convention center
(University of the Ryukyus)**

October 9, 10 2010
